

鳩トビ―教育者会津八一の人間像―

鳩

——教育者会津八一の人間像——

小 笠 原 忠 著

アポロン社

著者略歴

明治38年、赤城山の麓に生れる。早稲田中学校、早稲田高等学院を経て、昭和4年、早稲田大学文学部国文学科卒業。早稲田中学校教員、三共株式会社、陸王内務機株式会社、大正製薬株式会社を経て、現在、株式会社関水社勤務。長篇小説「裏路」「火の蕾」並に「会津八一歌がたみ一条良」等あり。「文学者」同人。

鳩 一教育者会津八一の人間像一

©

昭和45年2月5日 発行

¥ 650



著 者 小 笠 原 忠

発行者 加 瀬 正 治 郎

印刷者 和 田 和 平

発行所 東京都千代田区 神田神保町1-50 アポロン社

電話 (294) 3576~7 振替東京 97720

文栄印刷・橋本製本

序 文

丹 羽 文 雄

苦節十年、二十年ということばがあるが、小笠原忠君はそれ以上の文学修業に忍耐づよく打ち込んできた作家である。早稲田の国文科を私といっしょに卒業した。

小笠原君は牛歩的ではあるが、文学の本道を確実に進んできた。流行に色目を使はず、自心の文学をあくまで追究してきた。誠実なことである。

「鳩」（原題「鳩の橋」）はもっともよく小笠原君の特色を伝えている。若き日の会津八一氏と作者の少年時代の接触が、心のあたたまる筆で描かれている。作者の文学精神が誠実な感銘をともなって脈うっている。この作品は芥川賞候補となり、テレビ化され、作者を世に出した代表的なものである。

「目白」と「猫」は庭の草花や、早朝に庭を訪れる小鳥たちと作者の微妙な交流を描いた巧緻な作品である。透徹した作者の心境を静かに語っている。

小笠原君は、ともすると忘れられがちな善意の文学を執拗に追求している。ながい時間をかけて醸酵する美酒のような作品を、小笠原君は今後も私たちの前に見せてくれるであらう。大切にしたい作家である。

2

昭和四十三年盛夏

軽井沢にて

目次

序文		丹羽文雄	一
鳩			七
目白			究
猫			九
兄弟			一四
解説「鳩」について思うこと		料治熊太	三三

装幀 杉本健吉

鳩

鳩

この一棟は創立当時のままの建物で、右が校長室と応接室、左が教頭室と宿直室になっている。そのうす暗い廊下を歩きながら、私は全く後悔していた。まさか、こんなにも早く今朝の私の失敗が教頭の耳にはいるとは思っていなかった。

一時間目の歴史の授業のおわり近くに給仕の少年が小さな紙片をもってきた。教員室に呼びだされるのは誰だろうと、興味をもつて授業のおわるのを待っていたら、それは思いもかけず私への呼び出し状であった。しかも、教頭室へくるようにと書いてあった。担任の先生ではなく、教頭から直接呼びだされるのは初めてのことである。直感的に今朝の出来事で、ひどく叱られるものと想像した。叱られるどころではなく、停学か、あるいは退学になるかも知れないと云う予感もあって、このまま家に逃げ帰りたい気持もあった。

歩きながらも、足がふるえるのが自分にも、はつきり解った。逃げ帰りたい気持がある癖に、

おそるおそる、教頭室のドアをノックした。危険と知りながら崖のふちに近づいてゆくのを、どうしても思いとどまらない夢の中あの気持に似ていた。中から「はいれ！」という大きな体格をした人特有の幅のある重い声がきこえた。来るところまで来てしまったと思った。ドアを開けた瞬間、予期はしていたものの、教頭とならんでいる顔を見て驚きを新たにした。やはり、今朝私をつかまえた、あの枯れたような老人であった。セルの着物に、少し疲れた袴をつけている。あの時の噛みついてきそうな恐ろしい顔が思いだされて、改めて、ぞっとした。

教頭室は古い木造建てで採光も悪く、うす暗いので助かったが、それでも椅子に腰をかけて私を待っていた二つの顔は、とても、まともには見られなかったので、お辞儀をしたまま、私は泥によごれた床板をながめながら教頭の叱言を待った。私はもう、すなおに観念していた。

「お前は今朝、飯を食べてきたかね」

それが、おどおどしている私への教頭の最初の言葉であった。やさしい言葉に、かえって度胆をぬかれた。雷が落ちるほどの叱られかたを予期してきた私は、ひどく戸惑った。何も言えなかった。

「――」

「今朝は、随分早く学校にきたんだってねえ。この小父さんが、そう言ってるよ」

「はい、すみませんでした」

「この小父さんの顔、知っているだろう」

教頭にそう言われた時には少し落ち着きを取り戻していた。静かに顔をあげて、そのいやらしい老人の顔を改めて見なおしたが、いつまでも見てはいられない顔なので、すぐに目をそらせてしまった。六十近いと想像される渋紙のような顔が私を睨めつけているらしかった。

「知っています」

私は下を向いたまま小声で答えた。

「ほう、そうかい。この小父さんは、お前が犬養さんの屋敷の中にはいつて鳩をつかまえようとしたと言っているが、うまく、つかまえられたかね」

「駄目でした」

私は更に一段と頭をさげ、教頭に詫びる素振りをみせた。

「とんでもない奴で、ひとの屋敷に勝手にはいって来て——」

待ち切れないという感情を露骨にみせながら隣の老人が咳き込むように言葉をはさむと、教頭はいそいで、その言葉をさえぎった。

「まあ、まあ、そうむきになりなさるな。あんたも承知していなさる通り、第一、鳩はつかま

えていない。むしろ、つかまつたのはこの生徒の方ですぞ。しかも、この生徒は自分の組と名前をあんたに言っている。少年に大切なことは正直でなければならぬ事で、わしの学校ではそれを教育のモットーにしている。その点では、この生徒は褒めてもいいと思ってますぞ」

「とんでもない事を言う。この泥棒野郎を褒めるなんて——」

隣の老人は大袈裟な声をたてたが、すぐに教頭はその声をかき消すように話をつづけた。

「要するに、あんたがいきまぐ程の事柄ではないですなあ。鳩は日本中、どこにでも住んでいますぞ。犬養さんの屋敷は広い。だから鳩も遊びにくる。この理屈はわかって貰えましょう。いいですか。鳩が遊びにくる。その鳩と遊ぶために、うちの生徒が犬養さんの屋敷にはいる。それが犬養さんにとって、どれだけの迷惑になる、どれだけの被害があったと、おっしゃりたいのかな」

「それが解りませんか。この上なく迷惑なこっちゃ」

「あ、んたの主人の犬養さんは、そんな人じゃないんですぞ。日本国中のあらゆる人たちが、どうしたら安心して幸福に暮らすことが出来るか、そればかりを考えていらっしゃる。よろこんで犬養先生ご自身いつでも犠牲になろうと考えておられる。それが本当の政治家というものですぞ。鳩一羽ぐらいが、なんだというのですか。垣根を越えたぐらいが、一体なんだといった

いのですかな」

「しかし、私には私の責任が——」

呼び出した私をそっちのけにして、教頭と隣の老人とが、はげしく渡り合いはじめている。私はどうしたらよいのか解らなくなってしまった。二人の争いを聞いているだけであった。

「わかりますぞ。わかりますぞ。あ、ん、たの気持はわかりますぞ。あ、ん、たは責任を感じておる。それでは、この生徒をどうしろと、おっしゃるのですかな」

「嚴重に処分すべきで——当然」

「まあ、まあ、お静かに願いたい」

「実に、けしからん」

老人の額には青筋が走りはじめた。喧嘩腰になってきた。私はひどく心配になってきた。どうなるかと思った。

「あ、ん、たが何とおっしゃろうとも、あ、ん、たの指図によって処分することは出来ませんぞ。処分しなければならん時は学校が決定する。いくら偉い政治家だからといっても、うちの生徒を処分することは出来ない。いや、犬養さんという人はそんな方ではない。あ、ん、たの出る幕ではなさそうですな。まあ、今日のところは、お引き取りになってはいかがですか」

「とんでもない。とんでもない」

老人はまだ、何かわめき立てようとしているが、後の言葉がうまく出てこないようであった。椅子には腰かけていられないという感情をみせて立ちあがった。その時、二時間目の始業を知らせる鐘がきこえてきた。校庭のざわめきが少しづつ静かになってきた。

「お前は教室に帰れ」

教頭は私に命令するようにいった。重苦しい空気から解放されて、うす暗い廊下にでた時、じいんと熱いものが線をつたわるように、両方のこめかみの中を走って行った。

私は柔道部に入っていた。寒稽古に皆勤すると、最後の日に褒美として手拭が貰えることになっていた。それが欲しいばかりに私は二年続けて寒稽古に出た。その手拭には「武士魂 木堂」と染めぬいてあった。木堂とは犬養毅の号で、隣に住んでいるよしみで書いてくれたということがある。

犬養さんの屋敷は広がった。私の中学と隣り合って、しかも同じくらいの広さを持っていた。校庭と隣り合わせになるところは生け垣が境界線になっていた。特に柔道の道場との境あたりは簡単なものであり、手入れもしていないので、いくらでも通り抜けることが出来た。

そのあたりは母屋からも相当遠くはなれていて全く荒れ野という感じであった。休み時間に逍遙するには適當の場所であった。武蔵野の面影をそのままに残していた。櫟林くわいぎんになっていて、芒すすきもかなり茂っていた。ところどころに山茶花さんしかもあった。鳩がよく遊びにきていた。

二度目の寒稽古に皆勤して、私は四級の上になる資格を得た。その日の納会の試合に珍しく三人を抜いて、一挙に三級に昇級した。それから犬養さんの手拭も貰った。

春休みも終って三年の新学期を迎えた時、私はとても嬉しかった。急に上級生になったような気がした。先輩として四年生と五年生がいるが、一年生と二年生を下級生と呼べる立場となったのである。そればかりでなく三級から色帯になるので、道場の中でも下級生にとっては目立つ存在になっていた。一年生は可愛かった。柔道について何も知らない新入生に、先輩として受け身から始めて柔道の手ほどきをするのは、とても気持よかった。得意であった。乙にすましたい気持もあった。新入生はどんな気持で色帯を締めている私を見ているだろうかと思ふと、そんな気持を想像してみるだけでも愉快であった。かつて、私がこの部に入部した頃に抱いたと同じ感情を持っているに違いない。私は色帯をあこがれの気持で眺め、その帯を締めている先輩たちに対して尊敬の心を持った。今、新入生のあどけない目はこの色帯にあこがれの心を持ち、私に尊敬の念を抱いているに違いないと想像していた。

それに、間もなく委員にも選ばれた。四年と五年の委員は受験勉強があるので、実際の運営は三年の委員が責任を持ってしなければいけないと部長の先生からいわれた時は本当にうれしかった。仕事の骨折りよりも、大人になったという喜びの方が遙かに大きかった。稽古がおわり、部員たちが帰っても後かたづけを終わらないうちは帰れない。どうしても遅くなってしまふしかし、遅くなることも嬉しかった。遅くなるということには大人になったという喜びと、同時に責任を持たなければならぬ立場があたえられたという誇りがあった。時には雑談に時間をつぶして、わざと遅くなる日もあった。

そんなある日、四年生のある委員が「鳩が釣れる」といいだした。五年生のある委員が「魚じゃあるまいし、そんな馬鹿なことがあるもんか」と反対した。それは道場の隣になっている犬養さんの裏庭に鳩がよく遊びにきているのを見ての話であった。

ちょっと恥かしいが、私には上級生に対するへつらいの心があった。

「僕が実験してみる」と申し出た。即座に両方から「やれ」とけしかけられた。私は得意になって引き受けると、その晩、母にねだって釣糸と釣針とを買ってもらった。翌日、稽古がおわって部員が帰るのをみはからって、犬養さんの裏庭に入り込んで針を仕掛けた。鳩に気付かれないようにと思つて長い釣糸を二本用意して、櫟の根元に結びつけ、一本の針には豆をさし、